

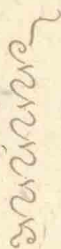
啼く鳥の



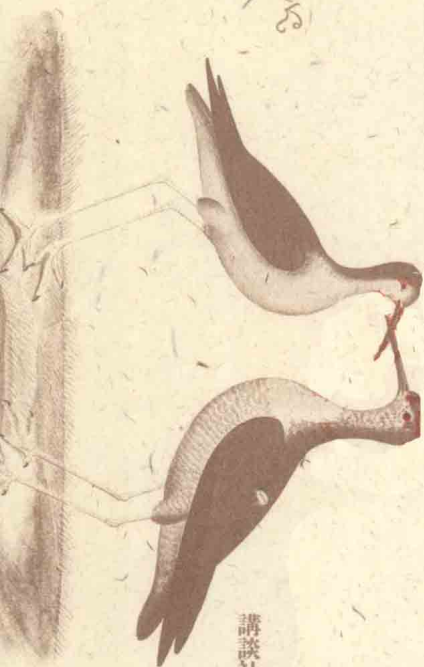
Unk. 1818



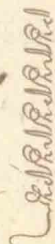
啼く鳥の



大庭みな子



講談社



啼く鳥のなとり

一九八五年十月十八日 第一刷発行

著者——大庭みな子

© Minako Oba 1985, Printed in Japan

造本——杉浦康平／協力・赤崎正一



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京区三二四二二三（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

オフセット印刷所——凸版印刷株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-06-202145-5(0) (文1)

啼く鳥の

1

ものを言うときは、気をつけて言わねばならない。口に出して言うとは、ほんとうにそうになってしまうからである。

百合枝から突然電話がかかって来たとき、みずきは叡山の中腹にある山小屋めいた家で庭いじりをしていた。

「お留守かと思ったの、諦めて切ろうと思ったら、まあよかった。今、彦根にいるの」

百合枝の声の調子や抑揚のつけ方は、死んだ母のふうにどこやら似ていて、みずきはいつものことながらひき寄せられた。百合枝はふうの従妹なのだから不思議なことではないが、親たちが死んでしまうと、その当り前のことが不思議なものに思われた。

百合枝とは生まれる前から繋がっていたようにも思えるし、みずきがカールと一緒に半年ぐらい前からここに住むようになってから、頻繁に電話をかけてくる妙な声の持主、えたいの知れない糸でずるずるとひき寄せられる長年の友人とも言えた。亡母のふうのずっと年下の従妹で、独

りっ子のみずきには姉のような存在だったが、どこか間抜けているので、むしろが妹のような気がする。

出版のあてがあるわけでもないが、みずきは真間百合枝の書く小説の英文翻訳を手がけていて、カールの来日と自分のサバティカルリブを合わせて日本に来てから連絡はとり合っていて、そのうちみずきが東京に行くなり、百合枝が京都に来るなりして逢おうということになってはいたが、彦根から電話をかけて来たところを見ると、やっと再会が叶うわけである。

週に一回くらいは必ずある長電話で、百合枝の空想とも幻ともつかぬ話を延々と聞かされていると、いつもうるさくその辺に漂ってまつわりついていたふわふわした黒い影が手ざわりのある物体と共に近づいてくるという感じがあった。

「省三と一緒にだけども、伺ってもいいかしら」

「まあ、嬉しい。今晚、うちにお泊りになって下さい。いつも百合枝さんたちのこと毎日飲むお茶かスーpmたいに話していますから、カールもお会いしたがつています」

百合枝が省三と連れ立ってやってくると、みずきはもっと驚いた。

省三はどこやらみずきの亡父の誠一郎に似通っていたからである。百合枝はともかくとして、省三は誠一郎とは何の血のつながりもないのに、百合枝が口上を述べる間、後の方で、ちょっと頭を下げたり、意味のない笑いを浮かべたり、言葉にもならない小さな音を出して頷く感じとか、気が大きいのか小さいのかわからない、おだやかそうで強情な感じなど、死んだ父親の誠一郎にそっくりだった。

「みずきさんの旦那さまは日本語お話になれるの？ 電話ではすごおいRの音のきつい英語でいつも悩まされてるけど」

「日本語も普通のことぐらいいは喋れるの。でも百合枝さんと省三さんとなら英語になっちゃうかしら」

みずきがまだアメリカの大学にいて、カールと結婚するとかしないとか言っていた頃、旅の途中だといって、突然ふらりと訪ねて来て以来、二十年ぶりの再会だった。

「百合枝さん、肥っちゃったのね。なんだかわたしのお母さんに似て来たみたい」

「そうね。わたしたち、従姉妹だったけど、よく姉妹に間違われたもの。ふうさんも誠一郎さんが死んでから急に肥っちゃったわね。でもふうさんは大柄だったからさまになったけど、わたしなんか、ダルマになっちゃう。この人、わたしのことブタネコっていうのよ。どういうことかしら」

横の省三をしゃくって、「この人」という言い方をする百合枝のものの言いは、電話で馴らされていたとは言え、音声に伴って目の前に実在の人物を置くと、みずきはどぎまぎした。

百合枝に顎でしゃくられた省三はアハ、アハと咽喉の奥でも痒いような妙な音を出して、首を後にそらしていた。

きっと、これが、この人の照れかくしの仕草なんだわ、みずきは思った。

「ねえ、ブタネコってどういうイメージなのよ。はっきりさせなさい。はっきりと」

百合枝はまるで数学の答えでも要求するような命令的な言い方で省三の脇腹を人差し指で突いた。

「この人はいつもわたしをバカにしているのよ」

「ブタとネコを一緒にすると、何かこう奇怪で滑稽なイメージがあるじゃないか。尊敬しているつもりだ」

「へつらつてるところもあるんじゃないですか？」

みずきは省三の顔色を素早く読みながら文字と音で馴らされている百合枝の思考をたぐり寄せて言った。

夫婦を扱うにはどっちにも味方しないのが原則だが、ときどきセスチュアとしては蝙蝠のようにあっちにいたり、こっちにいたりして双方の機嫌をとり結ばなければならぬ。一般に同性の側についておく方が無難である。自然の情に従えば、異性の方に同情的になるのが普通だが、秩序を保つためには不自然なやり方をしなければならぬことがよくある。

「それがむずかしいんですね、彼女は。あきらかにへつらつてることがわかるような言い方だと気に入らないし、いろいろ苦勞しますよ。いろんな要素が複雑に入っていて、何がなんだかわからないようなのが無難ですかねえ——」

ときどき不明瞭にたたみ込むような百合枝のものの言いくらべて、省三の方はひどくゆっくりとした間延びした悠長さである。

「いろいろ大変ですね。作家の奥さんをお持ちになると」

みずきは百合枝を刺戟しないように、さりげなく省三に相槌を打った。

「何がなんだかわからなさすぎても気に入りませんからねえ」

省三は溜め息混りにふたたびのんびりと言った。

「植物人間になる一步手前の混濁状態のような口の利きようをしないでくれと罵ります。あなたをよくも彼女の作品の翻訳しようなんて気になると感心していますよ」

「なんだか、死んでしまった父だの母だの、それからむかし知っていたような人たち、それから、今も、そのへんにうろろしているような人たちが、次から次に土の中から這い出してくる

土虫みたたいに出てくるんですよ、百合枝さんの作品は」

みずきが用心して賞め言葉を選び分けながら言う、百合枝は嬉しそうな顔をしていた。

少し前、百合枝より先に百合枝の末の妹の桃枝が訪れて、さんざん姉の自慢とも悪口ともつかないようなこぼし話をして行った。

「百合姉さまはね、あの人は少し頭がおかしいんだから、そのつもりであしらわなきゃだめよ。

省三さんも百合姉さまと一緒にいたお陰で大分おかしいわよ。あの人たち年がら年中連れ立って歩いているから、あたし金魚のフンって言ってやるの。あんな女房の勝手な言い草をふんふん真面目になって聴き惚れていて、どうかと思うけど。まあ、あたしは内政には干渉しない主義だから放っておくけれど、あたしは百合姉さまの肉親なんだから、たまには百合姉さまとだけ喋りたいと思うことだってあるじゃない？ それなのに省三さんがいつも金魚のフンみたいにあとにくっついていて、鬱陶しいったらありやしない。

あの人たちの両方に気を遣ってたら、くたびれるなんてものじゃないわよ。それで、あたしが気を遣っておどおどすると、あんたは妙に気を遣って、人を疲れさせる、頭が悪い、って罵るんだから。

気を遣わなきゃ遣わないで、ずうずうしい、鈍感だって言うんだから。

あたしはまだしも間に菊姉さまを置いて末に生まれたから被害が少ないけれど、菊姉さまは百合姉さまのせいでほんとに可哀そうよ。小さいときから、百合姉さまの勝手な言い分に押し切られて、損ばかりしてたんじゃないかな。親というものは、あんまり理性的じゃないから、先に生まれた子供が理不尽なこと言っても、面倒臭いから放っておいて、遅れて生まれた者は割が悪いのよ。もっとも百合姉さまに言わせれば、先に生まれると、いつも二人の妹の面倒見させられて

外敵に立ち向わなきゃならないんだそうだけど。でも、あの人、すごおい意地悪だと思うと、気味悪いぐらい優しかったりして、ついほろりと騙されちゃうんだか、いいと思っちゃうんだか、へんな快感も与えてくれる人なのよ。

あの人はずけずけものを言い始めたら、負けずにずけずけ言い返してやらなきゃだめよ。そのときはかっかとして罵り返すけど、あとになると修正するようなどころもあるから、救われるけどね」

桃枝は解説した。

みずきが桃枝のその解説を思い出していると、百合枝はみずきの心を読むように、省三が手洗いに立ったすきに言った。

「ごめんなさいね、省三まで連れて来て」

「あなたのそばにいつもいたいだよ。鹿を連れた仙女か、鹿を連れた仙人か、どっちかしらね」みずきが笑うと、百合枝はまんざらでもない顔で、肩をすくめた。

「全く氣を利かせて中座することも思いつかないんだから。」

今日だって、相手がみずきちゃんでしょう。彼、あなたのお母さんのふうさんにぼおっとしていたのよ。ふうさんの方は彼なんてまるで眼中になかったけれどね。ともかく、むかしいいなと思つて眺めていたふうさんの娘のあなたに会えるんで、いそいそしている男に、あなたついて来ないでよ、とは言いにくいのよ。

あなたが男なら連れてなんか来ないけどね。やきもち焼かせて愉しむんだ。彼、わたしと想像力の種類が違うのかな。同性には無関心なんだ。こっちがやきもち焼かせようと思つても平気で、自分が興味のある女にしか興味を示さない幸福な男なの。

ない学者になったり、窓際族の会社員になったりするみたいですが」

「あなた、そういうのを愉しんでいらっしやるの」

「愉しんでいるのかもしれませんが。百合枝のような女のそばにいますと、退屈しませんから」

みずきは二の句がつけなくて黙ってしまった。

「きっと、誠一郎さんもそうだったんですねえ」

また話が誠一郎のことになってしまった。

「あなただってそう思うでしょう。誠一郎さんはおふうさんをとてゝも氣に入っていましたよ。ときどきなぐりつけたりしていたという話ですが」

「わかりましたよ」

みずきは呆れてまじまじと省三をみつめた。百合枝が省三のことを、「あの人はあたしを殴った」などと言ったことを思い出したからである。

「省三だってあたしを殴った」

案の定、百合枝は自慢するように言った。

「頬の骨にひびが入っているに違いない。寒くなると、今でも痛い」

彼女は言つて左の頬を押さえてみせた。

「小説家というのは大げさで困ります。この調子で三十年も訓練されていれば、大抵のことには驚かなくなつてしまいますよ。」

しかし、ニュートン力学のエネルギー保存の法則というのはまあ成立するんじゃないですか。ぼくは彼女に大方好きなようにさせてやっただから、ぼくだって少しは好きなようにしなくちゃ。この辺で宮仕えも切り上げどきだと思います。あまり年をとってしまったのでは、もう軀

た。

そこへ省三が帰って来て、

「紅葉がきれいですねえ。錦織りってあの色模様なんですわねえ」

と言った。

みずきは二十年以上も前、アメリカにいた頃、高校時代夏休みにしばらく二人の家に厄介になっていたことがあって、子供をかかえていつまでも学生女房をきめこんで、夜遅くまでがさがさと本を読み、省三が毎朝出勤するのに、寢床から起きもしない百合枝を見ていたので、「こういうことになったのも、仕方あるまいさ」と思つて二人を眺めていた。

「省三さん、百合枝さんは随分勝手なことを小説に書いていますわねえ」

「世の中の男どもを怒らせるようなことも言つてみたいですねえ。しかし、亭主のぼくが平氣なのに、なぜあいつらは怒るのかな」

「きつと、省三さんを含めて腹を立てているんでしょう。こういう亭主がいるから、女房はこんなふうになるって」

みずきは省三を少し怒らせたくなったので挑撥するつもりで言つてみたが、省三はケロリとして頷いた。

「そうですね。そうかもしれませんわねえ。誠一郎さんもそうでしたよ」

と話をみずきの父親のことに持つて行つた。

「百合枝さんの書く小説の中では、女主人公はいつもいろんな男の人と勝手なことをしていますわねえ」

「ぼくらしい人物は、いつも寝とられ亭主でぼけつとしてますわねえ。藪医者になったり、学問の

「どうして殴ったのよ」

「忘れちゃったわよ」

百合枝は威張って言った。

「きつとわたしは豫でなしのことを言ったには違いないけど。——この人、昂奮するとももの言えなくなるのよ」

省三を弁護しているのかなじっているのかよくわからない。

「ああ、思い出した。——思い出したくなかったから思い出さなかったのよ。省三のお母さんの悪口を言ったからよ」

省三は気弱げに目を伏せている。先刻の雄弁と全然そぐわない怯えたような眼つきでちらちらと女房を盗み見している。みずきは噴き出しそうになったが、百合枝をへんな風に飛躍させないためには黙っているほうがいいと判断した。

「省三のお母さんてわたしみたいな人なのよ。だから思う存分罵ってやったのよ。そうしたら、彼、齒の根が合わないみたいに昂奮しちゃってわたしを殴ったのよ」

「わかった！」

みずきは叫んだ。

「そういうお母さんに訓練されたから、省三さん、百合枝さんに耐えられるんだ」

「びっくりしないだけです。生まれたときからの状況だから」

省三は落ちついて言った。

「殴ったところは大了なものね」

「動揺しただけです。論理がないから」

の方が言うことをきかなくなつて好きな暮らし方もできなくなつてしまいますすしねえ。

いつかウィークデイに昼間街を歩いて見ましたら、まるで世の中が違つて見えました。女の人たちは嬉々としてテニスをしたり、図書館で歴史の本が何か読んでいた。ぼくらがくそ面白くない書類をいじりまわしたり、会いたくもない客にべこべこ頭を下けている間に、こういう場所があるんだなあとと思うと、考えこんでしまいましたよ。

公園で小さな子供を遊ばせている若い女の人を眺めていたつて、こういう生命のあり方をじつと見つめていられる女の人の気味悪さに考えこんじやつた。

まあ、いいですよ。ぼくらがわけのわからない世の中の部品めいたところにしがみついて、ねじの一本とか、鉚のひとつ二つをいじりまわしたりしているくせに、天下国家のことを論じたような気分になっている間に、こういう場所がちゃんと生きていたのなら、子供たちが育つたのならそれもまた悪くはなかつたんでしよう。

でも、もう、ぼくたち、千枝も結婚しちゃつたし、これからはちょっとぐらゐぼおつと呆けていたつていいでしょう」

百合枝はそういう省三を白い眼で見つて、ふん、という顔つきをしていた。

「ほらね、省三は実に上手くまるめ込むでしよう。わたしは、あなたがわたしの眼が黒くなるほど殴つた話をしていたのよ。話をそらさないでよ。

お母さまが生きてた頃その話をして聞かせたら、お母さまは殴られたわたしより腹を立てて、お母さまはお父さまに殴られたことなんか一度もなかったわ、あんたはよくそんな男と一緒にいるもんだと言つたのよ」

話の続き具合がへんだとみずきの頭はぐらぐらした。

「どうして殴ったのよ」

「忘れちゃったわよ」

百合枝は威張って言った。

「きつとわたしがお母さんのことを言ったには違いないけど。——この人、昂奮するとももの言えなくなるのよ」

省三を弁護しているのかなじっているのかよくわからない。

「ああ、思い出した。——思い出したくなかったから思い出さなかったのよ。省三のお母さんの悪口を言ったからよ」

省三は気弱げに目を伏せている。先刻の雄弁と全然そぐわない怯えたような眼つきでちらちらと女房を盗み見している。みずきは噴き出しそうになったが、百合枝をへんな風に飛躍させないためには黙っているほうがいいと判断した。

「省三のお母さんでわたしみたいな人なのよ。だから思う存分罵ってやったのよ。そうしたら、彼、齒の根が合わないみたいに昂奮しちゃってわたしを殴ったのよ」

「わかった！」

みずきは叫んだ。

「そういうお母さんに訓練されたから、省三さん、百合枝さんに耐えられるんだ」

「びっくりしないだけです。生まれたときからの状況だから」

省三は落ちついて言った。

「殴ったところは大了なものね」

「動揺しただけです。論理がないから」

「論理がね」

鵜飼返して言いながら、みずきは男と女の間柄には論理がないなあ、と感心した。

「世間の人たちはみんなわたしが悪妻だと思っているわ。悪いのはいつもわたしで、省三はいい人だと思っているわ。とんでもないわよ。損してるのはいつもわたしよ。この人の家系はずる賢い家系なのよ。おだやかに沈黙を守って、自分の思い通りにするのよ。わたしは騙されて、こき使われるのよ」

「でも、省三さんのお母さんは百合枝さんに似てるんでしょう」

「あなた、わたしの作品を翻訳しようなんて思う癖に矛盾の論理がわからないの。

ギリシャ悲劇の昔からの人間の運命よ」

百合枝はみずきを睨みつけた。

省三はどういうわけか嬉しそうな顔つきになって、また喋り始めたので、みずきは観念して目を閉じた。

「真間百合枝はだらしない女ばかり主人公にして、あるいはだらしない男でもいいですが、いい気になっているという読み方もあるわけですが、大体男というものは、できることなら世界中の女たちに種子をばらまきたいという本能はあるわけでしょう。男がいつも挑撥されたがっているのだから、挑撥する女がいけないというのもへんですよ。男なり、女なり、片側ばかりからの要求じゃ、必ずどこかにエネルギーがたまって爆発して仕返しを受けます。

ぼくらの世代は散々ですよ。何かと言えば、これこれこうこう、かくかくしかじか、男は女を虐めて来た。電信柱が高いのも、大根の値段が高いのも、赤ん坊が泣き喚くのも、女がバカなのもみんな男のせいだ。女の欠点はすべて男のせいだということですからやりきれないなあ。戦争を